

臨地実習が看護学生の心理状況におよぼす影響

—臨地実習前後の自己効力感と自尊感情の変化と学生の特性ととの関連—

伊藤ももこ 新井清美 竹内久美子 口元志帆子 古谷剛 石光芙美子 林美奈子
(Momoko ITO Kiyomi ARAI Kumiko TAKEUCHI Shihoko KUCHIMOTO
Tsuyoshi FURUYA Fumiko ISHIMITSU Minako HAYASHI)

【要約】

学生の心理状況を把握することは、臨地実習での心理的状况を捉え、教育方法や内容へ反映させていくために必要である。本研究では、4週間におよぶ成人看護学Ⅰにおける学生への心理状況への影響と、学生の特性が、臨地実習での自己効力感や自尊感情にどのような影響をもたらすのかを検討することを目的とする。A大学看護学部2008年度3年次生85名を対象とし、質問紙調査を実施した。調査には、個人志向性・社会志向性PN尺度、自尊感情尺度、一般性自己効力感尺度を使用し、実習前後の変化やそれぞれの相関について検討した。その結果、学生はグループメンバーの関わりや看護師、患者との関わりによって自尊感情を有意に上昇させること、実習前後の自己効力感には有意な変化がなく演習の強化や成功体験等の意図的な介入が必要であること、社会に対する肯定的感情が低い学生は実習での体験を通して、自尊感情を高めることが明らかとなった。

キーワード：成人看護学実習、自尊感情、自己効力感、社会志向性、個人志向性

I. はじめに

これまでの臨地実習における研究は、学生の看護技術項目経験度や学生の自己評価で行われることが多く、学生個々の成長や変化を捉えている研究は少ない。しかし、臨地実習における学習は、個々の学生の心理に大きく影響することが指摘されている。遠藤は、看護学生にとって臨地実習は、緊張感と多大なストレスを有する学習であることを指摘している¹⁾。これまでの先行研究で、臨地実習が特に看護学生の心理状況の中でも、自己効力感および自尊感情に影響することが明確となっている。また、臨地実習という特異な学習環境の中では、学生個々の自己効力感や学習意欲を高めることが、学生の主体性を育むことにつながるとの指摘もある²⁾。このため、臨地実習指導においては、学生個々への学習への配慮が必要であることが示唆さ

れている。

しかしこれらの先行研究では、学生個々の性格や志向といった特性が、臨地実習での自己効力感や自尊感情の変化にいかなる影響を及ぼすのかという点が明らかになっていない。そこで本研究では、4週間におよぶ専門看護技術実習（成人看護学Ⅰ：以下、成人看護学Ⅰとする）における学生への心理状況への影響と、学生の特性が、臨地実習での自己効力感や自尊感情にどのような影響をもたらすのかを検討することを目的とする。

II. 成人看護学の科目の構成

1. 成人看護学Ⅰまでの学生の臨地実習経過

1年次9月に人間関係・コミュニケーション実習（基礎看護学Ⅰ）で1週間、同じく1年次2月に基礎看

いとうももこ：看護学部看護学科
あらいきよみ：看護学部看護学科
たけうちくみこ：看護学部看護学科
くちもとしほこ：看護学部看護学科
ふるやつよし：看護学部看護学科
いしみつふみこ：看護学部看護学科
はやしみなこ：看護学部看護学科

護技術実習（基礎看護学Ⅱ）で2週間の実習を経験している。2年次に臨地実習はなく、コミュニティ実習として保育園や老人保健施設での実習を2週間行っている。したがって、3年次の春学期に展開される成人看護学Ⅰは、学生にとっておよそ1年半ぶりの臨地実習である。

2. 成人看護学Ⅰの展開

1) 目的

長期的な健康問題を持ち、健康段階や生活状況を維持・向上させるためのセルフケアを必要とする、成人期にある患者と家族への看護を実践するための基礎的知識・技術・態度を習得する。

2) 目標

- (1) 長期的な健康問題を持つ成人期にある患者を身体的側面、患者と家族の心理的・社会的側面から理解する
- (2) 患者の長期的な健康問題に対するセルフケア能力の維持・向上のために必要な援助を計画し、実施、評価する
- (3) 長期的な健康問題を持つ患者のQuality Of Life（以下QOLとする）を向上させるための看護活動について学ぶ
- (4) 医療チームメンバーの一員として他職種との連絡調整を図る
- (5) 看護実践の場における安全管理の実際を理解する
- (6) 実習を通して自己・他者理解を深め、援助的な人間関係を形成する

3) 展開方法

実習期間は4週間であり、そのうち16日間は臨地実習である。4週間継続して受け持つことが可能である患者をできるだけ選定し、看護過程を用いて援助を実施する。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査対象

A大学看護学部2008年度3年次生85名を対象とした。

2. 調査時期と回収率

- 第1回調査：成人看護学Ⅰ開始前
（平成21年4月）62部（73%）
- 第2回調査：成人看護学Ⅰ終了後
（平成21年6月～7月）46部（54%）

3. 調査項目

1) 学生の特性

- (1) 個人志向性・社会志向性PN尺度：個人志向性・社会志向性Pは、個人の肯定的な側面における社会適応的特性と自己実現的特性尺度であり、個人志向性・社会志向性N尺度は、個人の否定的な側面における個人志向性・社会志向性尺度である。いずれも「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「あてはまる」の5件法で回答する形式である。個人志向性・社会志向性PNは、尺度化されており、4つの尺度各々の尺度得点が算出可能である³⁾。

2) 学生の心理状況

- (1) 自尊感情尺度10項目：これでよい（good enough）と感じる程度が自尊感情の高さを示す。「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「あてはまる」の5件法で回答する形式である⁴⁾。
- (2) 一般性自己効力感尺度16項目：何らかの行動をきちんと遂行できるかどうかという予期の一般的な傾向を示す。「はい」「いいえ」で回答する形式であり、1項目1点で合計点を算出することが可能な形式である⁵⁾。

4. 調査時期と調査項目

調査時期と調査項目について詳細を表1に示した。

表1：調査時期と調査項目

	調査時期	調査項目
第1回調査	成人看護学Ⅰ前	・個人志向性・社会志向性PN ・自尊感情 ・一般性自己効力感
第2回調査	成人看護学Ⅰ後	・自尊感情 ・一般性自己効力感

5. 調査方法

第1回調査の際に、学生に独自の数字とアルファベット4ケタのIDの記載を依頼し、第2回調査においても同様のIDの記載を依頼した。個人とIDが特定されないように、学生が独自に考えたIDを採用することとした。

6. 分析方法

回答者のうち、実習前後にどちらも回答した31名(36.4%)を分析対象とした。データの分析は、統計ソフトSPSS Ver18を用いて以下の手順で実施した。

- 1) 個人志向性・社会志向性PN尺度の尺度得点と尺度の信頼性係数を算出する。
- 2) 実習前後の自尊感情の得点および自己効力感得点の平均値を比較する。
- 3) 個人志向性・社会志向性PN尺度と実習前後の自尊感情得点・自己効力感得点との相関係数を算出し、関連性を検討する。

7. 倫理的配慮

学生には、研究の趣旨を口頭と文書で説明した。質問紙は無記名で個人が特定されないこと、研究の参加・不参加は成績には関係しないこと、研究結果を公表することを説明した。回収は、別場所に回収箱を設け、学生が自由に提出できるようにした。また、同意書に署名し、質問紙と共に回収箱に投函することで、研究参加への同意とみなした。

IV. 結果

1. 学生の特性

学生の特性を捉える目的で、個人志向性・社会志向性PN尺度を用いて調査を実施した。個人志向性・社会志向性PN尺度の尺度得点および尺度の信頼性係数(α)を表2に示した。

表2：個人志向性・社会志向性PN尺度得点及び信頼係数(α)

	項目	α
個人志向性P	2. 自分の個性を活かそうと努めている	.74
	3. 自分の心に正直に生きている	
	5. 小さなことも自分ひとりでは決められない※	
	7. 自分の生きるべき道が見つからない※	
	9. 自分が満足していれば人がなんとおもうと気にならない	
	13. 自分の信念に基づいて生きている	
	15. 周りとは反対でも、自分が正しいと思うことは主張できる	
	17. 自分が本当に何をやりたいのかわからない※	
社会志向性P	1. 人に対しては、誠実であるよう心掛けている	.71
	4. 他の人から尊敬される人間になりたい	
	6. 他の人の気持ちになることができる	
	8. 他人に恥ずかしくないように生きている	
	10. 周りとの調和を重んじている	
	11. 社会のルールに従って生きていると思う	
	12. 社会(周りの人)のために役に立つ人間になりたい	
	14. 人とのつながりを大切にしている	
	16. 社会(周りの人)の中で自分が果たすべき役割がある	
個人志向性N	1. 周りの人のことを考えず、自分の思ったままに行動することがある	.41
	3. 自分の性格は、わがままでと思う	
	5. 個性が強すぎて、人とよくぶつかる	
	7. 何ごとでも独断で決めることが多い	
	9. 自分中心に考えることが多い	
	11. 人に合わせるよりは、たとえ孤独であっても自由な方がよい	
社会志向性N	2. 何かを決める場合、周りの人に合わせることが多い	.55
	4. 人の先頭に立つより、多少がまんしてでも相手に従うほうだ	
	6. 人前では見せかけの自分をつくってしまう	
	8. 何か良くないことがあると、すぐ自分のせいだと考えてしまう	
	10. 相手の顔色をうかがうことが多い	
	12. 人の目ばかり気にして、自分を失いそうになることがある	
	13. 困ったことがあると、すぐ人に頼ってしまう	

※逆転項目

さらに、個人志向性・社会志向性PN尺度の平均値を表3に示した。

表3：個人志向性・社会志向性PN尺度の平均値

個人志向性平均値 (SD)		社会志向性平均値 (SD)	
P	N	P	N
3.36 (.63)	3.53 (.54)	3.88 (.49)	3.81 (.46)

2. 実習前後の学生の心理状況

本調査に利用した自尊感情および自己効力感尺度は、これまでの先行研究において、信頼性・妥当性が確認されているため^{4) 5)}、本調査における分析に耐えうると判断した。個々の合計点を算出し分析を行った。

1) 成人看護学 I 前後の自尊感情得点の分布

成人看護学 I 前後の自尊感情得点の分布を図 1 に示した。満点 50 点のうち、成人看護学 I 前の最低得点は 16 点であり、最高得点は 35 点であった。中でも、26 点～30 点までの得点層が 38.7% と最も多く、次いで 21 点～25 点までの得点層が 25% と多かった。成人看護学 I 後の最低得点は 19 点であり、最高得点は 40 点であった。成人看護学 I 前と同様に 26 点～30 点までの得点層が 45% と最も多かったが、次いで多かったのが 31 点～35 点の得点層で 29% であった。

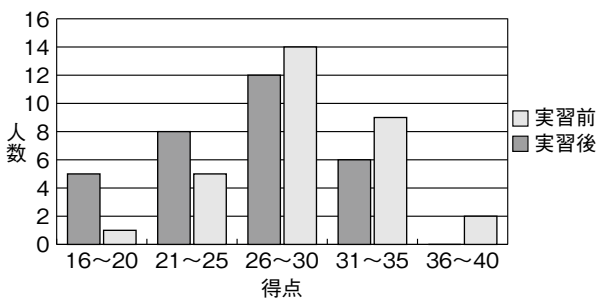


図 1：実習前後の自尊感情得点

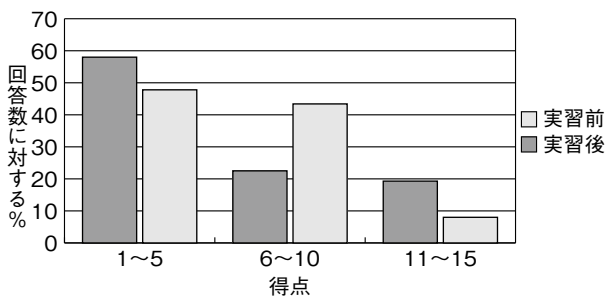


図 2：実習前後の自己効力感得点

2) 成人看護学 I 前後の自己効力感得点の分布

成人看護学 I 前後の自己効力感得点の分布を図 2 に示した。満点 32 点のうち、成人看護学 I 前の最低得点は 1 点であり、最高得点は 15 点であった。中でも 1 点～5 点の得点層が 58% と最も多く、次いで 6 点～10 点の得点層が 22.5% と多かった。一方、成人看護学 I 後の自己効力感得点については、最低得点 0 点であり、

最高得点は 14 点であった。中でも 0 点～5 点の得点層 47.8% と最も多く、次いで 6 点～10 点の得点層が 43.4% と多かった。

3) 成人看護学 I 前後の自尊感情および自己効力感得点の変化

成人看護学 I 実習前後の自尊感情得点および自己効力感得点の変化について、前後の平均点を対応のある t 検定を用いて比較した。成人看護学 I 前後の得点の変化を表 4 に示した。

成人看護学 I 前後の自尊感情得点の平均点を比較すると、成人看護学 I 前が 26 点であったのに対し、成人看護学 I 後が 29.2 点と上昇していた。すなわち、成人看護学 I 前と成人看護学 I 後の自尊感情得点を比較すると、成人看護学 I 前よりも成人看護学 I 後が有意に自尊感情得点が増加していたことが分かる。(p<.01)

自己効力感得点の平均値を比較すると、成人看護学 I 前が 6.1 点であったのに対し、成人看護学 I 後が 5.8 点と低下していた。成人看護学 I 前後の自己効力感得点の平均点に有意差は見られなかった。

表 4：成人看護学 I 前後の自尊感情と自己効力感の平均値

N = 31

自尊感情得点平均値		自己効力感得点平均値	
実習前	実習後	実習前	実習後
26.0	29.2	6.1	5.8

*** p < .01

3. 学生の特徴と成人看護学 I 前後の心理状況との関係

成人看護学 I 前に調査した社会志向性・個人志向性 PN 尺度については、4 つの尺度の α 係数から尺度の信頼性を検討し、社会志向性 P 及び個人志向性 P が統計学的な分析に耐えうると判断した。そこで社会志向性 P 尺度得点および個人志向性 P 尺度得点と、成人看護学 I 前後の自尊感情および自己効力感についての相関係数を算出した (表 5)。その結果、成人看護学 I 前自尊感情得点と成人看護学 I 後の自尊感情得点に関しては .56、成人看護学 I 前自尊感情得点と成人看護学 I 前自己効力感得点は .66 であり正の相関を示した。社会志向性 P と成人看護学 I 後の自尊感情得点は Pearson の相関係数 -.40 であり、負の相関を示した。

表5：社会志向性Pと成人看護学I前後の自尊感情と自己効力感の相関係数

	実習前 自尊感情	実習後 自尊感情	実習前 自己効力	実習後 自己効力
社会志向性P	.16	** -.40	.19	.18
個人志向性P	.15	***.10	***.23	.38
実習前自尊感情		.56	.66	.07

** p < .05 *** p < .01

V. 考察

1. 成人看護学I前後の自尊感情

成人看護学I前と比較し成人看護学I後には、自尊感情得点は上昇していた。学生は成人看護学I前の段階では、患者を受け持ち、既習の知識や技術を統合し、対象を理解しながら看護過程を展開し、看護ケアを実践することに対して不安を抱えていると考えられた。しかし、臨地で経験を積み重ねる中で、これまで不安に感じていた事柄が達成できるようになり、対象に合った看護援助へと発展させることができた実感するのではないかと考えられる。また、4週間に及ぶ長期間の成人看護学Iを実施することができたという達成感も相乗し、自己の能力や価値について「これでよい (good enough)」と感じるレベルが高くなったと考えられる。

成人看護学I前の不安要素として患者とのコミュニケーションを挙げる学生は少なくない。本学成人看護学Iは、実習期間が4週間であり、看護師や受け持ち患者、グループメンバー、教員や臨床指導者との関わりが多いことが予測される。この4週間の中で、コミュニケーションスキルを活用したコミュニケーションができるようになったと感じ、自己の能力を確認し、自己尊重へとつながったことが推測できる。臨地実習中、学生たちは、グループメンバーと体験を語り合うことにより、心身共に辛くストレスフルな体験を共感し、その状況を励ましあうことも多かった。加えて教員や臨床指導者は、患者が学生を受け入れられるように調整するとともに、患者からの肯定的な反応を学生に伝え学生が主体的に援助できるように配慮してきた。これらにより、学生自身が自己の能力や価値に対して肯定的に感じるようになったことが、自尊感情を高める要因となったと考えられる。

2. 成人看護学I前後の自己効力感

自己効力感が高まると、ある課題ができるという自分の能力を高く判断するようになり、積極的な思考、努力配分および感情などに影響し、十分な実力が引き出されるといわれている。自己効力感を高めるためには4つの源があるとされ、「成功体験」(自分で行動し、達成できたことを積み重ねること)、「代理体験」(自分と同じ状況や、同じ目標を持っている人の成功体験から問題解決方法を学び、自分にもできるのではないかと自信を高めること)、「言語的説得」(教員や実習指導者など周囲の人が学生の行動に対する努力を認め、能力があるということを言葉や態度で支援し、同時に精神的にも学生を信じ、認め、支援すること)、「生理的・感情的状態」(身体的に良好な反応や、感情的にポジティブな状態を自覚すること)、を体験することで自己効力感を高めることができると言われている⁶⁾。

本学学生の成人看護学I前後の自己効力感の平均値は、成人看護学I前が6.1点、成人看護学I後が5.8点であった。成人看護学I前と成人看護学I後の自己効力感には有意差はなく、成人看護学Iによる自己効力感の向上は望めなかった。これは、成人看護学Iが春学期に開講されており、学生にとっては1年半の長期間をおいての臨地実習であり、病棟への適応や、実習という生活への適応に時間を要したことが関連していると考えられる。また、学生は病棟という不慣れな環境下で、実際の患者に対して看護過程を展開し、看護技術を実施する。つまり、学生は学内での学習に比較しストレスを感じやすい状況であり、自己の学習不足や技術不足を感じ、不安を抱えて実習に臨んでいる。そのため、実際には体験している「成功体験」や「言語的説得」を感じにくく、学習状況や他者との関係などに対してきちんと全て遂行したという感覚にまで到達できず、今後の自己に対する課題を感じている傾向にあったことが推測される。

臨地実習によって学生の自己効力感を高めるためには、教員によって臨地実習中の成功体験を意図的に導くことや、言葉によって学生の努力を認め、支えることが必要であると分かる。また、教員や臨床指導者らが看護技術や患者との関わり、考え方について手本となるよう「代理体験」をさせること、更には臨地実習前の演習において、対象を理解させることに主眼を置いた演習を行うことの必要性が示唆された。

3. 学生の特性と成人看護学 I 前後の心理状況

本研究において、成人看護学 I 前に社会に対する肯定的感情が低い傾向がある学生は、成人看護学 I 後の自尊感情を高める傾向にあることが予測された。これは、成人看護学 I でのグループ活動や看護師・患者・家族等との関わりから、社会に対する自己評価を高め、自尊感情を大きく上昇させたことが推測される。

社会に対する肯定的感情が低く、社会に対する適応性に自信が持てない学生たちは、臨地実習中の体験が誘因となり、社会や自分自身への意識が変化したと考えられる。本調査対象は3年次生であり、生活体験や社会経験は希薄であることが予測される。このため、臨地実習での体験そのものが、社会や個人の認知傾向に影響しやすい状況であると考えられる。臨地実習では、学生にとって、体験した内容が個人や社会に肯定的な捉え方となるように配慮していく必要がある。これらの学生の認識および心理状況の変化は、主体的な学習を支援することにつながるのではないだろうか。

VI. 結論

1. グループメンバーの関わりや看護師、受け持ち患者との関わりを4週間取り組むことにより、学生は実習後の自尊感情を上昇させる傾向にあると推察された。
2. 実習前後の自己効力感には変化が生じなかった。実習前には対象理解を促す演習の強化を行い、実習中には成功体験や代理体験、言語的説得を意図的に行なう必要がある。
3. 社会に対する肯定的感情が低い学生は、実習での体験を通して自尊感情を高めることが明らかになった。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究の限界と課題は、以下の2点である。

1. 本研究では、分析対象が本学学生の31名と少なく、結果を一般化するまでには限界がある。今後研究方法に対する検討を行い、分析対象を増やし一般化できるよう検証していきたい。
2. 実習前後の自己効力感の変化に有意差はなく、教員による今後の実習での学生への意図的な関わり、実習前演習の内容について検討が必要である。

VIII. おわりに

実習前後で学生の自己効力感得点が低下していたことは、成人看護学 I 実習が4週間と長期であること、また春学期に開講されており、学生にとっては1年半ぶりの臨地実習の中、病棟への適応や実習生活への適応が困難であったことも関連していると予想される。しかしながら、実習前後での自尊感情得点は上昇している。これについては、病棟での実習の中で、学生はグループでの活動や病棟看護師との関わりの中から、自己に対する評価を高めた可能性は高い。膨大な実習記録をこなすことや、看護過程の展開において、度重なる教員や指導者からの指導により、自己の学習や行動については課題を感じ、自己効力感は下がった。その一方で実習そのものに対しては、久しぶりの臨地実習であり、かつ4週間という専門看護技術実習の中で最も長期の実習を遂行した自己に対する good enough の思いが大きくなり、自尊感情を上昇させたとも考えられる。

本研究においては、自尊感情を大きく上昇させた学生が、実習前に社会に対する肯定的感情が低い結果が明らかとなった。これは、実習でのグループ活動や看護師・患者・家族等との関わりから、社会に対する自己評価を高め、自尊感情を大きく上昇させたことが予測される。

VIII. 謝辞

本研究にあたり、ご協力いただいた学生の皆様に心から感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1) 遠藤恵子, 松永保子ら:看護学生の自己効力感 (Self-Efficacy) に関する研究 (第1報) —基礎看護技術演習による自己効力感の変化と影響する要因—. Yamagata Journal of Health Science. 2, 7-13 (1999)
- 2) 矢吹明子:コミュニケーションに課題を持つ看護学生のセルフ・マネジメントへの援助 (第1報) —セルフ・モニタリングへの継続的介入 (面接) の自己効力感に関連した効果. 京都市立看護短期大学紀要 31, 33-43.
- 3) 伊藤美奈子:個人志向性・社会志向性PN尺度の作成とその検討. 心理臨床心理学. 13, 39-47 (1995)
- 4) 山本真理子, 松井豊, 山成由紀子:認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究. 30, 64-68, (1982)
- 5) 坂野雄二, 前田基成:セルフエフィカシーの臨床心理学. 226, 北大路書房 (2002)
- 6) 岡美智代:透析患者のセルフケア行動と自己効力感.

月刊ナーシング. 23, 78-83 (2003)

【参考文献】

- 1) 宮本美佐子, 奈須正裕: 達成動機の理論と展開 続・達成動機の心理学. 182-183, 金子書房 (1999)
- 2) 園田麻利子, 花井節子ら: 自己効力感を高める実習前演習のあり方の検討. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要 12, 64-81 (2008)

